

だざいふ基本計画 2006Plan1 シンポジウム

これからののはなし これまでのはなし

第1部 記録映像上映

第2部 シンポジウム

宮原：本日は「だざいふ基本計画 2006Plan1 シンポジウム これからののはなし これまでのはなし」にお越しいただきましてありがとうございます。このシンポジウムでは、2005年9月に行なわれた「だざいふ スタードームフェスティバル 2005」(以下スタフェス)に関わりのある方、それから太宰府に関わりのある方をパネリストにお呼びして、これからの太宰府の発展をお集まりいただいたみなさんと一緒に考えていこうという趣旨で開催したいと思います。本日コーディネーター役を務めさせていただきます宮原です。よろしくをお願いします。

先程の第1部ではスタフェスのドキュメンタリー映像をご覧顶きましたが、ここからは第2部となります。それでは最初にパネリストのみなさんの自己紹介をしていただきたいと思います。まずは、アーティストの藤浩志さんです。

藤：自己紹介はどれくらいの時間で？

宮原：簡単をお願いします(笑)

藤：僕が自己紹介すると3時間くらいかかっちゃいますから(笑)。スタフェスへの関わりと言えば、僕自身はあまり動けなかったんですけど、相談を受けながらスタフェスをどのようにしていこうかという話をしていくのと同時に、一部参加者で出品もさせていただきました。僕自身は藤浩志企画制作室勤務となっておりますけど、いろんな企画をし、制作するのが仕事です。主に何が専門なんですかとよく聞かれるんですけど、相手によってコロコロ変わるのが専門です(笑)。人との関係の中で活動が出てきたりとか、イメージが出てきたりとか。さっきアーティストとご紹介がありましたけども、通常美術家とかアーティストというのは自分の中から湧き出てきたものを形にしたりとか、描いたりするとかする人だと思っんですけど、僕の場合は空っぽというか、何も出てこないという変なアーティストでして(笑)。誰かとお会いして話をしたりですとか、いろんな場所に行ってそこで対話の中からイメージが初めて発生してきて、それをどうやって形にしていましょうかということを考える作家だと思っています。

宮原：ありがとうございました。それでは次は芹沢高志さんです。

芹沢：自己紹介というのは僕もややこしいんですが、一番簡単に言うとアサヒビールさんがアサヒ・アート・フェスティバル（以下AAF）というのをやっています、スタッフェスも参加企画のひとつなんです、その事務局長をやっています。

宮原：それではAAFの審査でスタッフェスを選ぶ立場にあったということですか？

芹沢：去年横浜トリエンナーレという美術展があってそっちの方に僕が行っていたので、ちょうどCATがプレゼンに東京に来た時にはいなくて、後でみんながこれはおもしろそうだと言っていたのを聞いて採用しようという話になったので、直接選んだというわけではないんです。

もともと僕はアートとあまり関係ないところにおりました。僕があるお寺の設計に関わったところからこういう美術に関わるようになったんですが、元々は地域計画とか都市計画とかやっていた人間です。なので、地域の資源をどのように活性化していくのかというのは個人的にとっても興味があって、場の持っている力にアートが絡んで何かやっていくのはおもしろいと思っていたので、そういった意味でもこの太宰府には注目しています。

宮原：ありがとうございます。それでは次は太宰府天満宮の宮司さんでもあります西高辻信良さんです。

西高辻：太宰府天満宮の西高辻です。日頃は神主をやっていますが、もうひとつは自分ではそう大きく言えないのですが、うちの家訓の中に太宰府天満宮に一生懸命奉仕するのは当たり前だ、同時に太宰府を盛んにしなければいけないよ。太宰府のまちがあってこそ太宰府天満宮があるんだよという家訓がありまして、太宰府のまちを元気でいいまちにするということが、私がバトンタッチを受けている時代の私の仕事ではないかなと思っています。そういう意味では日頃から全国を回っていても太宰府の動く広告塔ですとっております。スタッフェスと関係があった部分と言えば、この企画のスポンサーになってくださいというお願いがありまして、僅かですが協力させていただきました。一番大事なことはこのまちしかできないおもしろいことをいっぱいやることじゃないかと思っております。

す。誰がやってもいい、おもしろそうなことがあればみんな首を突っ込もう。そんな空間をつくっていけばこのまちはもっとおもしろくなると思います。

宮原：ありがとうございました。これからはスタッフエスについて、藤さんは直接関わったサイドからお話を伺いたいと思っています。芹沢さんには全国で開催された AAF の中でのスタッフエスはこういったものだったのかというお話をさせていただきたいと思っています。西高辻さんには、大宰府政庁跡で行なわれたということ、地域資源から文化をつくるということからお話していただければと思います。

それぞれ 15 分から 20 分お話ししていただければと思いますが、お三方の基調講演が終わりましたら、フリーディスカッションに入って行って、会場のみなさんのご意見をいただきながら、去年のお話、これから太宰府でどういったことができるかというお話に発展できればと思っています。では、さっそく藤さんからお願いします。

藤：僕が最近注目しているのはイメージが立ち上げる前のモヤモヤしている状態です。モヤモヤは個人の中にある居心地の悪さであるとか、違和感のようなものから発生します。僕自身、子どもの頃は家庭内での親兄弟や友人関係で、サラリーマン時代は上司や同僚や会社に対して多くの違和感を抱いてきました。だれでもたくさんのモヤモヤをもっていると思いますが、地域にも多くのモヤモヤが渦巻いています。しかし、それをわざわざ意識化したり、認識しようとする人は少ないものです。

例えば、まちの中に変な看板ができたとして「なんだかおかしいな」と思っても、それをわざわざどうにかしようとする人は少ない。忙しいし、面倒ですから。そんなことをしてもきりがないとわかっています。

しかし、そんな些細なモヤモヤを捉え、言葉であるとか、なんらかの表現をしようとする。そこから新しいイメージが発生します。それが大切な活動の種だと考えています。

逆に捉えれば、大切な活動の種のためにはモヤモヤを言葉にしたり表現しようとする対話の場が必要だということです。みなさんの考えているモヤモヤをぶつけ合う場。そしてイ

メージを作ろうとする場が大切です。

僕が福岡に引っ越してきた 97 年の終わり、ふとしたことから対話の場を作りました。まちの中に見出した様々なイメージを話し合うミーティングテーブル “ PLANT ” です。

例えば毎日通勤のときに目にする川があるとします。その川は毎日見送るだけの川ですが、例えば仮に「川にボートを浮かべてみたいな」と思ったとします。でも普段そういうことは誰にも言えません。変な人扱いされることは容易に予想できますし、だいたいそれをぶつける相手も、用意された時間もない。例えば「川にボートを浮かべたい！」と言える場を作って、もやもやした気持ちを吐き出す。それに対して他の参加者が勝手な意見を言い合う。「そりゃ、危険じゃないか」とか「そりゃおもしろいね」とか。「釣りしたらどうだろう。」とか「川をきれいにしよう。」とか...そこから何か始まるんじゃないかと。とりあえず、そのような意見を出しあうテーブルが必要だと考えたわけです。計画や企画を載せるテーブルなので “ Planning Table ”。それを縮めて “ PLANT ”。同時にまちに対して表現をするのは苗を植えることに近いんじゃないかという意味もかけています。

“ PLANT ” は 97 年末から毎月 2 回 1 年間継続して開催し、そこからいろんな活動が発生しました。建築家のグループが基地づくりのモヤモヤを形にして「日本キチ学会」というのができたり、ある作家はまちの中に自分の表現の場を見つけて相当おもしろい活動をはじめきっかけにもなりました。現在も博多を中心に全国に広がっている博多灯明のワークショップの手法もここから始まったものです。

物事の価値というのはその物事に誰と対峙するかで変わってくると思うんです。どんなつまらないものでも、ある人と対峙することでものすごい価値が生まれることがある。例えば、(お茶のペットボトルを持って)これをペットボトル不買運動を実践している人と飲むと、ものすごい罪悪感が生まれ、中身の水すらも保存料とか着色料とか入っているような気になり、環境悪で自然破壊の原因にもなるととても悪い存在に思えるかもしれないし、ペットボトルの水もお茶も飲んだことのない人と飲むと、とても便利なありがたい健康な飲み物に思えてくるし、このお茶の開発者と飲むとその苦勞を語りながらそのペットボトルの中に込められている人生に涙するほどの感動を見出せるかもしれません。

例えばある人にとって、基地遊びという子どもの頃の忘れかけていた些細な思い出話が、子どもの頃の基地作りに大きな魅力を持っている建築家と出会い対話を重ねる中で自分の行っていた基地作りの思い出がかけがえのないほど大切なことなんじゃないかと思いはじめ。とにかく些細なモヤモヤでも、誰か別の価値観を持つ人と対話を重ねることで大切なイメージの種となることがあるわけです。

PLANTの第2弾ということで2年前に再開したのが“plants！”です。「PLANT」を小文字にして複数形にして、もっといろいろな些細な対話をたくさん重ねたいと思っていました。そこに参加し、モヤモヤを抱えていたのが太宰府市役所の職員有志だったわけです。

さて、さらにまちに必要なことがあります。それは、「実験すること」です。いくら対話を重ねても、実際に何かを行ってみたいとわからないことがいっぱいあります。当たり前の話ですが、どんな科学者だって実験を重ねて新しい発見を導き出すわけですし、実験せずにいきなり成功することなんてありえません。様々な実験を通してまちに関わる事がとても大切だと考えています。まちのいたるところを様々な使い方をして実験すれば相当おもしろくなります。しかし、残念ながらその考えはまだ一般的には普及していません。失敗することを避けようとするからです。僕はこの失敗することがとても大切だと思っているのですが…。

PLANTの時にはまちの中で行う表現を「苗を植えること」に例えて説明していました。どんな些細なことでもいいから、まちに何かを表現します。もしそれがおもしろければ水と光があたります。水というのは興味・関心とかで、光というのは批評や批判です。それが大切なんです。水と光があることで苗は育つかも说不定。批判を受けることで苗は強い植物に育ちます。あるいは水も光もあたらず枯れてしまうかも说不定。もし枯れてしまったとしても、その土地にとってはそれが養分となって、次の新しい苗を成長するのに非常に重要になってくるのです。些細な表現を繰り返し、成功や失敗を重ねることでその土地が豊かになるという考え方です。そうやって考えると、実験をするというのはすごく大事で、成功しても失敗してもその地域にとっての経験となります。

実験によってイメージが蓄積されて、その土地の養分になります。さらにそこから予測できない様々な活動が連鎖して発生する可能性もあります。そういう意味では無駄なものはないんです。どんな馬鹿げたものだっていい。

この対話と実験の現場をどうやって街に仕掛けるのか。そこに最大の興味と関心があります。僕自身は何かが始まり、何かを実験し、失敗したり、成功したり、そのプロセスに立ち会うことの面白さを知ってしまったんです。不幸なことに（笑）。結局、モヤモヤがイメージに立ち上がるまでが僕の仕事だと思っています。僕にとってはそこがいちばんおいしいんです。

例えば去年のスタフェスはイメージの立ち上げの段階だったんですよね。モヤモヤからイメージを立ち上げる。多分参加した人たちは非常に大変だったと思いますが、いちばんおいしい「作る」というプロセスを共有できたと思います。もちろん、イメージが立ち上がったものを流通させることも重要です。そっちの方がお金は集めやすい。運営もやりやすいかもしれない。イメージが出来上がっていますから人に伝えやすい。しかし、僕自身が興味あるのはそれ以前のところです。つまり、なにもないところから「つくるプロセス」です。

最近、AAF もアサヒビールさんが支援しているように、地域とアートという言葉をよく耳にしますが、そこでアートの示すものは「つくるプロセス」だと思っています。そこが勘違いされやすい。アートというと完成された高価な「もの」を意味するような美術教育を受けてきてしまったのが邪魔しているのでややこしくなってしまう。

地域の中で、個人の、あるいは地域のモヤモヤをぶつけてほしい。モヤモヤからイメージが立ち上がります。そのイメージを「つくるプロセス」をアートと呼ぶのかなと…。イメージが立ち上がってしまうとそれは流通する可能性を持ちます。流通を促すためにデザインされ、ブランディングされ、結果として地域に何か形成されはじめます。その最初の「つくるプロセス」をつくるのが僕の仕事だろうと思っています。

宮原：えーと、その「つくる」というプロセスですけど、スタフェスをやりたいという CAT

が plants!に来てから最初のきっかけというのは？

藤：最初どうだったか忘れましたが、何かやりたいという気持ちを持ってきたとおもいます。僕が唯一アドバイスしたことは、絶対自分たちで作ったほうが面白いということです。まず自分たちでできるところでお金がないなりにつくった方がいいと。

これは僕が大切にしている考え方ですが、なんでもないものの方がいいんですよ。相対的な変化の度合いを重視する考え方です。すでに価値があるものに価値を見出そうとしてもおもしろくない。価値の幅が相対的に小さいじゃないですか。

例えば、今現在、社会的に認められてないものだとか誰も注目してないものに、ある人間が意思や想いを投じて、手を入れることで凄いものに変化してしまい、「うわぁー！すごい！」ってことになったとすれば、その技術がまさにアートだと思うんです。

それは多分、もうすでに常識を超えていると思うんです。非常識ではなくてこれは超常識ですよ！そこに感動が伴うのではないかなと思うんです。

この話は美術大学の学生にもよく話をします。絵画も考えてみるとゴミの集まりのようなものです。炭の粒子だったり、石の粒子だったり、貝殻の粉だったり。それを分別して、色分けして、それをきれいに並べて、重ねて、イメージを描くわけです。それで風景を描いてみたり、人物を描いてみたり、死後の世界を描いてみたり、楽園を描いてみたり。でも元はゴミみたいな一粒の粒子です。そこに技術が伴うわけです。彫刻なんかもそうですよね。石とか岩とか、その辺にあるものをカツカツ彫るとですね、みんなが感動するようなミケランジェロの彫刻のようなものができてしまうわけですよね。木もそうですよね。枯れた木は燃やせばそれで終わっちゃうんですけど、枯れた木を干して、製材して、家ができるわけですからね。いろんなものに変わっていく。そこには必ず人の想いとか技術が入っていて、その技術を僕はアートだと思っています。ということで考えると、いかに今注目されていないものに注目するかということが非常に大事なんじゃないかと思うんですよね。感動を生み出すためにはね。

宮原：スタッフスの中でちょっと聞きたいなと思ったのが、超常識に変わる瞬間というか、

そういう技術というか...

藤：まず、スタードームをつくるというアイデアを持ってきたとき、これはおもしろいなと思ったんですよ。スタードーム自体が超常識で面白いんですけどね、竹を使ってすごくよくできてますよね。それはいいとして、それをスタフェスで20基つくるって言いはじめたんですよ。これは...バカだなあって(笑)。現場を知らないなあって思ったわけですよ。相当大変な作業が予想されますから。僕にとって20基は常識的ではないんですよ。どっちかというところの場合、非常識ですよ(笑)。そりゃ20基できたらすごいことになるけど、それに気付いてないんだろうなあって。で、絶対できないだろうなって。でもそれがね、実際にあの空間に入って、さっきの映像で見たらわかるように、現場で体験した人はわかるように、あれは20基あるからすごいんです。いろんな表現のバリエーションもできたり、いろんな人が関わるレイヤーが多層にできた。例えば子どもも参加できたり、若い人も参加できたり、いろんな人たちが参加できた。あれがもし3つだけだったら、そうはなりません。もちろん100個でもいいんですけど、CATでできるギリギリの常識を超える数だったと思います。それはホントにすごいなあって思った瞬間でしたね。感動しました。

宮原：そろそろお時間なので、それでは次は芹沢さんをお願いします。

芹沢：えーと、今日僕がここに参加しているからには、AAFについてご紹介する立場かと思うんですが、まず最初に言っておくと、去年のこのスタフェスには行くことができなくて、写真とかでは見せてもらったんですけど、こうやって映像で見せてもらうと、もちろん実際に行くのとは印象が違うんでしょうけど、すごく魅力的な空間ができているなあと、すばらしいなと思いました。まず、その感想を言った上でAAFについてお話ししましょう。

AAFには、2006年もスタフェスとは違う形ですが、CATには参加していただいています。AAFは今年で5年目になりました。「アサヒ・アート・フェスティバル」と聞くとものすごく素敵な気もすると思いますが、これをフェスティバルと呼んでいいのかということも含めて、やっている本人たちにもよくわかってないことが多いのですよね。いちばん最初は単純で、文化活動の支援をやっているアサヒビールさんのメセナ・セクションが音頭をとってはじまりました。彼らも悩みというかモヤモヤを抱えているわけで、いろんなすごいことをやっているんですが、すごいからこそわかりづらい。社内には「こんなことやってビールの

売り上げにつながるの？」という声もあるでしょう。

その一方で、「アサヒビールくらいの会社になると、文化とか芸術とかちょっとは支援しておかないとかわるのかな」という感じもあるはずですよ。まあどこの会社でもそんな感じだと思うんですけど。だから彼らのやっていることを個別に説明していくと理解されにくいので、ある程度それらをまとめちゃってアートフェスティバルとしてしまえば、そうか、フェスティバルをやっているのかと、少しはわかりよくなる。こんな想像をアサヒビールさんがいないところで話していると怒られそうですけど、はじめはそんなところじゃなかったかと思うのです。アサヒビールさんの本社が隅田川の横というか、吾妻橋を渡って浅草の対岸にあるんですね。ここにもともと工場がありまして、その工場跡地が墨田区役所とかといっしょに再開発されたんですけど、その周辺の地域の方といい関係をつくらうということは、芸術のことはさておいて、アサヒビールという会社としてすごく意識されているところではありました。そんなこんなで、せっかくやるんだったら隅田川の周辺の地域、東京の下町の文化を見直そうということになり、セーヌ川の左岸みたいにね、隅田川の左岸地域を考えればかっこいいんじゃないかということで、隅田川左岸地域の文化的活性化を意識してフェスティバルを組織しました。

しかしそのうち、全国でやっていたロビーコンサートという企画が全部フェスティバルに入ってきたりとか、2年目、3年目には、その意味がかなり変質してきたんですよ。拡大、お金の意味で大きくなるという意味ではなくて、パートナーとしてやってくれる人たちが全国にどんどん広がって行ってしまった。本当に北海道から沖縄までいるんなところでいろんな活動をされている人たちがつながっていった。それで、活動の趣旨は変えないとしても、今まで知り合った人たちだけでやっているとか閉じちゃうとか限界がくるだろうということで、2005年の段階で公募を入れたんですね。

それでなんでか知らないけど、CATが応募してくれてきた。我々もよくわからないままですね、さっきの映像でも言っていましたけど、CATの八藤丸さんが東京にいらっやっして、プレゼンをして、それで選ばせていただいて一緒にやってみようということになったんです。AAFにはアートという文字が入っているわけですが、はっきり言ってCATは別にアートとは関係ないところから出発している。じゃあどうしてそれを選んだのかという

背景を思い出してみると、AAF のコンセプトには3つの考えがあるんですね。「未来・市民・地域」というのがあるんです。

まず、何かやっていく際に、過去にしがみつくとするか、今までのものだけを守っていくのではなくて、先を見ながら未来志向の視線というのはすごく重要だなと。当然そこには、まだその価値がわからなかったり、何がどうなっていくのかわからないものもある。さっき藤さんが言ったように実験みたいな、とにかくやってみようという、そういう意思も含めて“未来”なんですけど、“未来”というのを重視していこうと。

あと“市民”なんですけど、じゃあ“市民”ってなんなんだ。それは難しいんですけど、今では、国だとか、CAT は市の職員だけと、行政とか会社とか既存の制度といいますが、そういったところからちょっと離れて、個人として、しかし、いわゆる個人的な世界にこもるのではなくて、みんなとの関係というかパブリックなものに対して主体的に関わろうとしている個人がだんだん出てきているように思うんです。新しい市民像というのが生まれているとするなら、そういうことを加速させたい。そういう意味で“市民”をコンセプトに掲げます。

“地域”というのは、地域密着的なものを大事にしようという考え。そういう観点から考えると、CAT の企画は大宰府政庁跡みたいなすごく魅力的な場所で、市民の皆さんが加わって、実際何が起こるかわからないけど、やってみようという意欲だけははっきり伝わってくるわけで、じゃあ AAF2005 に参加してもらおうということになりました。AAF2005 は37件、2006 は22件、全国から集まった企画を選ばせてもらいました。特にここ5、6年は、東京から何か出てきて、それを地方に持ってきて、さあどうだみたいな、そういう流れが逆転してきて、地域から独自のプログラムがどんどん出始めている。けれどそれらは往々にして孤立しているというか、地域的に閉じているところでやっているものだから、すごくしんどくなって、自分たちもなにやっているのかわからなくなることも多い。このフェスティバルを通して全国いろんなところにモヤモヤを抱えている人たちがいることがわかったんですね。なので、フェスティバルに参加してくれる人たちをネットワークでつないで、そこからなにが生まれるのかっていうのは先でいいんですけど、とりあえず同じような熱意や悩みを持った人たちが一同に集まって意見交換できるだけでもかなりいい

なと思ったんです。このAAFではネットワークというのを重要視しています。

年間3回は全国の企画者たちが全員集まるような場をつくったんですけど、それだけでも活性化につながるかなと思いました。他の場所のことを知って、自分たちの場所のかけがえのなさを知る。おそらく今の日本だけじゃなくっているんなところで起こっていることじゃないかと思いますが、グローバル化というべきかどうなのかわかりませんが、ものすごい勢いで一様化というか均質化が進んでいます。

そんな中、太宰府で、例えば北海道の帯広でやっていることと同じようなことをやっているんだったら、別にどこにいても同じだと思うんです。そうじゃなくて、この場所ですることできないことが出てきた時に、他の人たちにとっても、それが魅力になるわけです。やはり自分たちが住んでいる場所の再発見というのがこういった活動の重要な点かなと思うし、いろんなところと比較してみると、ますます自分の土地のこととか、活動を見直すことができるのだと思います。CATとかスタフェスといった苗が、今後この土地でどのように育っていくのかということに非常に興味があります。

宮原：時間ぴったりでありがとうございました。それでは続きまして西高辻宮司にお願いしたいと思います。

西高辻：スタフェスが太宰府政庁跡でありました。なんで太宰府政庁跡なんでしょう。他にも太宰府はいっぱい空間があったはずなんですね。太宰府天満宮の境内でもよかったと思うし、多分私もやろうって言ってたろうと思うし、例えば水城の堤防でもよかったと思うし、せっかくだから四王子山のとっぺんでもおもしろかったかなと思います。普通に考えてたら小学校とか学校の広場でもできた。いっぱいスペースはあったはずなのになぜ政庁跡だったんだろう。そこにこれをやる理由のヒントがあったんじゃないかなと私はそう思っています。太宰府に住んでいるとですね居心地のいい場所があるんですね。その最たるものが太宰府政庁跡なんですね。なんで居心地がいいんだろう。みんなそれを考えることがいちばん大切なことじゃないかと思います。太宰府っていつできたかわかっているんですよ。太宰府というのは西暦663年の白村江の戦いの直後に造られています。目的は九州の防衛とか外交とか様々な目的があります。そして、この設営に関わった人は百済の貴族なんですね。したがって日本で初めての計画都市がこの太宰府なんですね。これも

名前がまだ残っていますが、朱雀大路というのがあるように四神相応のまちづくりをやっているんですね。今でいう風水都市をやっているわけですよ。北に大野山（四王子山）を抱えてここが玄武で、月山があって蔵司があって、それからずっと気が流れてきて、そして東にある青龍の御笠川につながって、南に平野が広がる。だから居心地いいんですよね。いい空気がこの土地に流れてくるから、なんとなく居心地がいい。そういうのは理屈じゃないと思うんですよね。やっぱり太宰府で何かやりたいなあと考えた時に、政庁跡でなにかやってみたいねっていうのが、我々、この地域に住んでいる人間のひとつの思いじゃないかな。だからこそ、スタッフスを CAT のみなさんが立ち上げた時、やっぱり政庁跡で何かやってみたいねと思ったのは、無意識の中にそういう DNA を我々が持っていたということじゃないかと私はそう思っています。よく高校の頃、親父に連れられて太宰府の原点は政庁跡だと言われていたんですね。それでいつも礎石の上に座らされて、秋の夕方、歴史の話なんかを聞いたんですが、「おまえ、大伴旅人が見えるか？」って聞くんですね。「山上億良が見えるか？」って聞くんですね。見えませんよ、そんなの（笑）。でもね、最近見えるようになってきたんですよ（笑）。これがすごく大事なことだと思うんですよね。どうということかって言うと、つまり、「お前たちこの時代に、今っていう時代に大伴旅人や山上億良と遊べるか？億良が生きた同じ空間、同じ景色、同じ空気、同じ音、同じ季節感を我々が共有するんだよって。だから旅人と一緒に遊べる、それがこのまちのまちづくりだよ」と、うちの親父は言いたかったんじゃないかなと思うんですよね。だから遊んでいいですよ。旅人が、億良がアサヒビールを飲んだら、どんな遊びをしたらろうと、考えることが必要だと思うんですよね。それを共有する空間、それを今に表していくのが今の私たちの役目だと思うんですよね。私のいちばん嫌いな言葉が「文化財」。文化財って終わったものですよ。でも文化って生き続けているんですね。命をその時代その時代に吹き込まないと文化財って死んだものになるんですね。新しい命をもっともっと吹き込みながら、その時間を共有することが私たちの仕事。この地域に住む人間の仕事であるような気がするんですね。だからひょっとしたらこのスタードームというのは、そういう鍵を開けるタイムマシンだったかもしれない。政庁跡にスタードームができたことによって、ここの土地のエネルギー、気というのを現代風感じて、そして過去の 1300 年を共有する。その過去を共有することがこれから 100 年、200 年と共有していくことに繋がるんですね。それぞれの時代に太宰府に住んでいる人たちがこの太宰府を守っていくんです。そのひとつが、あれだけの特別史跡を守れたってことなんですね。あの空間を守れたってということなんです。

これが我々の先代たちの大きなテーマだったと思います。今度はこれをどう活かしていくか、命を吹き込んでいくかっていうことが我々の役割。どんなチャーミングなまちをつかっていくか。チャーミングっていう言葉は難しいですよ。魅力的って簡単に言うけれども魅力的というのはどんなものか。チャーミングなまちにするために、今私たちがどんなチャレンジをしていけばいいのかというのを考えることが、その時間を共有していくということに繋がると思います。私は太宰府天満宮の39代目です。39代前の宮司さんが偶然にも菅公様（菅原道真公）だった。だから私たちはずっと受け継いできたわけですが、だから菅公様が生きていたらどう考えるかなというのをいつも考えるわけです。いつもお祭りの時にお供えをあげていると、なんでいつも同じお供えをあげないといけないのかなと思って、この頃お祭りを変えました。私が食べておいしいもの、それを菅公様にも差し上げようと思いました。季節が今なら、5月のお花をささげて、そして今いちばんおいしいものを菅公にあげて、またそのおさがりをいただいて一緒に食べようと、これが菅公様がいちばん喜ばれることじゃないかなと。だから今、様々なお祭りを変えているんです。やっぱり、その時代その時代に、どんな古いことも生きてないといけないんです。太宰府に住んでいる人は、太宰府に住む時間は長い短いがあるかもしれませんが、この地域が1300年生き続けているっていうことは、みなさんそれぞれが46、7代目なんですね。大体30年を一代と考えると私が1100年で39代目ですから、それから考えると46、7代目になります。そういう受け継ぎ方をしてそれぞれの土地を考えると、どういうバトンタッチの仕方があると思う？今、この会場の前で日比野克彦さんの「アジア代表日本」のFUNESのワークショップを行っていますが、最初の頃は年をとったせいかわピンとこなかったんですね。だけど、それに加えブルーフラッグのプロジェクトもやった。これは結構おもしろいねって。日本で最初にサッカーというのを文化として、まちを青一色にしてみるのもおもしろいなって。それで今日から天満宮のおみくじがブルーに変わりました。全部が過去のものじゃなくて生きているものとして、その時代にあったものを常に地域に、そして社会に貢献していくことがこの土地のエネルギー。例えばこのまちが、百済の多くの人々を受け入れて、教育と食料を与えた。そういうおらかさと先見性がこの土地のエネルギーとすれば、その土地のエネルギーを自分たちがどう感じて、先に発信していくか、それを行動として表していくことが私たち46、7代目の人たちが預かっている人間の役割じゃないかなと思います。もっともっといい形で、環境も、自然も、空気も、文化も、保存活用していく、そんな感性が地域全体に広がったらこの企画は本当によかったなと私は思います。

宮原：どうもありがとうございます。今お三方からスタフェスについて、それぞれの立場でお話していただきました。聞いていて思ったんですけど、1300年の長い歴史と記憶を保存して、この太宰府が生き続けている中で、市役所の職員の人たちが、こういうフェスティバルをするというのは常識を踏み越える勢いというものがあったと思うんですけども、またそういう人たちをアートの側から見るとまたこれも常識を踏み越えるようなひとつの革命を起こしたというのが、ちょうど太宰府という地に九州国立博物館が開館する年に誕生したというのは、偶然ではなかったかなと感慨深くお話を伺っておりました。さて、どういう切り口でフリーディスカッションを、始めていけばいいかなと悩んでいるんですけど、どうでしょう。このスタードームフェスティバルの立役者のCATの皆さんにお話をお伺いして、それぞれディスカッションできたらと思うんですが、江藤さんどうでしょう？

江藤：どうも、CATの江藤です。今お話を聞いていてCATのみんなも思っていると思うんですが、...その時のみんなのこととか、気持ちとか、思い出して、それに宮司がおっしゃったように千年とかいう単位で考えるとですねー、なんか思い出したりなんたりで泣きそうになってですね（笑）。んー、どうしよっかな。えっとスタードームフェスティバルは、とりあえず「おもしろい」という気持ちだけでやっちゃったんですよね、やれちゃったというか。いろんな人に手伝ってもらったんですけども。やっぱりそれを1回で終わらせたくないから今回もAAFに参加して「だざいふ基本計画2006」という形で、これから長期的にずっとやっていくためにみんなでいろんなことを考えていこうというような、まだ中身はからっぽの計画をみんなで作り上げていこうと思っています。そんな感じで、地域の人たちともっと深く関わりあいながら、地域の資源を掘り起こしながら、ちょこちょこ活動を続けていこうと思っているんですけど、そのためのヒントというか、他の地域ではこんなのがあったよとか、そういうのを交えて、参考になるようなお話があればなと思うんですが...

西高辻：いいですか？ひとつはね、前回は太宰府政庁跡だったけども、あちこちでやってみたら？例えば場所を毎年毎年変えるだけでも新鮮ですよ。太宰府はそれだけのスペースを持っているんです、奥行きも。

藤：政庁跡でなぜやったか？山の上でもよかったし、天満宮でもよかった。スタードームがいろいろ移動していくのは面白いですね。スタードームにいろんな場所を経験させていくというのはすごく大事だと思います。

僕が風景や空間をつくる上で興味を持っているのは、その風景や空間を具体的にデザインするのではなく、風景や空間が作られてゆくシステムをつくるという考え方です。システムデザインには必ずツールが必要となってきます。ツールとして何をを使うかがネックとなります。今回の場合はスタードームというツールだった。それを使ってみなさんを招待したり、参加してもらおうシステムをつくったわけですね。

今後の展開を考える上でスタードームというツールをもっと深めるという方向性と、別のツールを考えるという方向性があるように思います。とりあえずツールをスタードームにしておいて、場所を変えていくというのもおもしろそうですね。誰に参加してもらおうかというのを考えることで内容は随分と変わりますが、政庁跡でやってそこに集まってきた人たちがいるとすれば、別の場所でやればもっと別の人たちが集まってくる可能性が高くなります。いろんな場所を使うことは、そのまちにとってとても重要だと思います。そこに関係していく人たちが増えますから。

宮原：芹沢さんにお伺いしたいんですけど、太宰府以外の日本の地域で、こういう感じの地域密着型の、アートに限らないにしても文化的な資源を生かして、生活されている人たちが巻き込まれて、自分たちが住んでいる場所に誇りが持てるようなプロジェクトを開催してるような地域で思い当たるところはありますか？

芹沢：実は、そういう流れが加速してきているって言ったんだけど、じゃあ例として挙げるって言われるとねえ、意外と困るんですよ(笑)。それぞれの場所で抱えている問題とか、可能性というのは全然違うから。

今日来てね、みなさんのお話を聞いて「太宰府も特殊だな」と思いました。とにかくこの場所の持つ力はずごいと思うので、AAFの中から例を挙げるのではなくて、自分が2002年に関わった場所のことを思い出したのでそれをお話します。

北海道の帯広で開催された「デメーテル」という展覧会です。北海道はどこもそうですが、開拓の歴史があって、もともとアイヌの人たちが住んでいたわけだから、基本的には侵略という方が正しいとも思えるのですが、とにかく開拓の歴史がある。それで、帯広では開拓が始まって 130 年のお祝いだから何かしなきゃということで美術展が考えられないかと、話はそこから出発しました。帯広は別に現代美術に熱心とかそういうわけではありません。それが、急に現代美術展をやるっていうふうに、市や商工会議所が決めて、ある意味落下傘的にどーんって話が降ってきた。僕は総合ディレクターを引き受けたので、せっかくやるんだったら地域にとって意味がないと嫌だからといって開催場所にこだわりました。でも、ぐっとくる場所が見つからなくて、最後の最後に偶然、帯広競馬場という場所を見つけました。そこが本当にすばらしかった。帯広ではサラブレッドの競走というのはもう廃れちゃってないんです。荷役用の大きな馬が重い荷物を引っ張って 200m 直線で走る、「ばんえい競馬」というのだけをやっている。それも、一年中そこでやってるんじゃなくて、北見とか岩見沢のような道内の 5 つの競馬場を回っていくんですね。帯広は冬だけ開催されるわけです。

それで、開催時になると、当然、馬もそこで生活しなくちゃならないし、厩務員やその家族もそこで生活することになります。ここに 700 頭くらいの馬と、2、3 百人の人間が移り住んできて、こつ然と、かりそめのまちが生まれる。そして、競馬が終わると、また、去っていく。ある種、神聖なというか、1 年に一度何かがあるところにやってきて、命がみなぎり、そしてまた去っていくというような、そんなことが繰り返される場所なんです。

そこにですね、僕と同世代の帯広の人と一緒にいたら、彼らがみんなどっかにいっちゃうんで、「どうしたの？」って聞くと、みんな涙ぐんで「子どもの頃に見た帯広の風景がここにあるんだよ」というようなことを言うんです。柏の木があって、一面に広がる雑草、馬糞の臭いとか、すべてが合わさって土地の記憶が保管されている。ああ、ここならやる意味があるなと確信しました。また競馬場の西側には開拓以前の風景をそのまま残した西町公園という公園があって、それも魅力的でした。それで、実際に美術展が開かれると、こんなことがありました。作品を見てる若いカップルが「馬の臭いがくさいね」なんて言っていると、横にいた年配のご夫婦が「何十年前にはまち中こんな臭いがしてたよ」なんて、

作品とは全然関係ない会話がそこから始まる。面白いなあと思いました。

みんなが現代美術を見たい見たいと思ってる世界だったら純粋に美術のニーズだけでやってもいいのかもしれないけど、そうじゃないような場所では、現代アートは道具っていうと申し訳ないかもしれないけど、さっき、藤さんが仰ったような意味でのスタードームと比べていいのか、ある種のツールにはなり得ると思うんです。アートをきっかけにして、今、見ているこの風景じゃなくて、それを成立させている場所の記憶、力というようなものを発見できるんじゃないか。宮司さんのお話を聞いているとね、この太宰府自体が持っている力はすごいものだと思う。そしてこの場所の記憶にそって想いを馳せれば、ずっと以前からの、例えば朝鮮半島との関係とか、いろんなことを含めてね、閉じている必要はない、今までの歴史とか文化的な風土自体を世界とつなげるための装置をつくれればいい。装置と言っても建物ではなくて、システムです。ここにはものすごいものがあるわけだから、それを開き、つないでいくことが重要ですね。興奮してちょっと喋りすぎちゃったかな。(笑)

藤：ブログを使っている人には使い慣れた概念だと思いますが、最近気になっている概念に「ストラクチャー」と「スキン」というものがあります。それで捉えるならば、この地域は「ストラクチャー」つまり構造がしっかり見える地域だと思うんです。だってここには太宰府天満宮があり、39代目という西高辻さんがいるわけですから。これは他の地域にはあまりないですよ。もちろん京都とか奈良とか、お寺があつたり、街路が残っていたり、そのまちの構造がそのまま見える地域もたまにあります。

でも実は誰もが同じだけの先祖の遺伝子を受け継いでいますし、どんな地域もそれぞれのストラクチャーを受け継いでいますからそこに存在するわけです。ところがそれが見えない場合が多いし、意識されていない場合も多い。

ストラクチャーは時代の価値観とともに変化します。例えば何もないところでも新しいストラクチャーを持つてくることで街はつくられる。工業都市というストラクチャーによって街が形成されたり、さらに商業という価値観が導入されて、次のストラクチャーが生まれたり、そうやって街は変化します。必ずそこにはストラクチャーがあるんです。僕が気になっているのは、そのストラクチャーの上に被さっている「スキン=表情」です。この

スキンという概念に最近ハマっています。

昔ハマっていたのが「行政 = OS」説でした。「行政はオペレーションシステムになるべきであり、アプリケーションは市民が作るべきだ。」という話です。基本システムがあるからアプリケーションが起動するんだと。そのようにコンピューターから派生した用語を引用することで新しい概念に出会えるのがとても面白いですよね。まあそれは置いて...

スキンというのは表面を覆っている皮のようなものですよ。つまり表情です。太宰府はそのスキンもストラクチャーにふさわしいものを持っていると思うんです。しかし、そのスキンを変えてみる実験はアリだと思うんですよね。スタフェスの場合、フェスティバルという形で別の表情（スキン）を被せてみたという捉え方もできます。ストラクチャーがしっかりしていないのに、表面的なスキンがどんどん塗り替えられてゆくのは非常にまずい。おおくの地方都市でこの現象は繰り返されてきたようにも思います。

しかし太宰府の場合、しっかりとしたストラクチャーがあるのでその点心配はいりません。どういう新しい表情 = スキンに被せていくかという話だと思うんです。そこで時代の価値観が反映されると思うし、それを作る人たちの価値観も反映されて蓄積されていくわけです。

おそらく他の地域と圧倒的に違うのはそこで、ここに太宰府天満宮があることと同時に今後も千年、二千年、数千年先へとしっかりしたストラクチャーを繋いでいかなければならないという地域全体の抱えるミッションがある。それを住民がどれだけ価値として誇りに思っているかが問題で、その意識を作らなければならぬし、その感覚を共有しなくちゃいけない。

ただ歴史があればいいんだということではなくて、そのストラクチャーをしっかり認識させる表情をリメイクしてゆくこと...、さっき西高辻さんが言われたように、「使っていかなきゃ育たない」と思うんです。もっとベタに言うと「まちづくり」ではなくて「まちづかい」「まちそだて」みたいな話で、つくるといって話じゃなくて、いかに使っていくか、いかに育てていくかと話したと思いますが、これだけしっかりしたブランドの高いストラクチャーを扱い、なおかつ表面、表情をつくっていくというのは、他の地域ではなかなかこれ

はありえない。そこが本当は一番おいしいところなんでしょうねえ。

宮原：先ほど藤さんが「他との違い」ということでお話されたんですけども、CAT のみなさんについて私が思うのは、他のアートプロジェクトと比べてみると、「アートじゃなくてもいい」とか、「アートとか関係ない」とか、そういう基本姿勢がとても気持ちがよくて、私にとっては。最初のきっかけが、スタードームを自分たちでクリスマスパーティー用で作って、それがおもしろくて、じゃあ人をもっと増やして、スタードームも増やしたらもっと楽しいことができるんじゃないかなという、自分たちの身の丈の楽しさ、おもしろさというのがモチベーションの出発点になっているというのが嘘がないというか、表面的でないなというのが正直な感想なんです。 「アートじゃなきゃだめ」ってアートプロジェクトを展開している地域のアートプロジェクトをやっている人は多いと思うんですけども、その肩を張っていないところが印象的です。それで私もちょっと聞きたいんですけども、大宰府政庁跡というのは「国指定特別史跡」となっていますが、そういうような場所で、あのようなことをするというのは可能だったんだというのが最初思ったことなんです。そんなところでやってよかったんだっていう感じで思ったんですけども。そういう意味では市民の方たちに対して、「こういう使い方ができるんですよ」と、もっと身近に自分たちが楽しむ場所として、ひとつの場所のあり方を提示していると思います。それで、その土壌というか、受け入れる広い心を持っている素地というのが太宰府天満宮の宮司さんを筆頭にあるんじゃないかなと思うんですけども、今、太宰府天満宮の方々が中心でアートという関わりとえば、今この会場の外でFUNNEを作っていますが、九博もCATももちろん関わっていますが、地域の文化を発信するようなセンター的な立場の人たちですね、ひとつのプロジェクトと一緒にやっていくということについて、西高辻さんほどのようにお考えですか？

西高辻：それは絶対必要なことだと思います。若者が頑張らないとまちというのは前に進まないですよ。年寄りばかり集まってもねえ。若者にたくさんチャンスを与えていくっていうのが、だんだん年をとっていく世代の役割じゃないかなと思います。やっぱり、バトンタッチを必ずしていくという時に、助走期間がいる。助走期間に何にチャレンジしていくかっていうことは非常に大事なことだと思います。ちょうど今、「アジア代表日本」のプロジェクトをやっているのはある意味、私から次の代に対する助走期間だろうなと思います。だから失敗してもいいじゃないか。失敗から学ぶことっていっぱいあるわけです。

が、全部成功しても全然おもしろくないし。このスタードームも幾つか失敗があるから楽しかった。その失敗を次はどういう風にしていこうかとみんなで考える方が有意義なことなんじゃないかと思います。今、残念ながらこのまちは薄っぺらです。どう厚みをつけていくか、ここじゃないかな。100年間このまちは博物館のためにがんばってきたんですね。明治の時から今日までかけて、やっとこの博物館ができました。とてもうれしかったのが、ちょうど博物館が出来た報告の御祭典を天満宮でやったんです。ここの土地がもともと天満宮が寄附した土地だったものですからやったんですけども、その時に職員が私より前三代の写真を本殿に掲げてくれて、その想いが私はとても嬉しかったんですね。そのようにみんなの想いを共有できるようなまちになればいいかな。地域の人や多くの人の想いがひとつになってまちづくりが進んで、こういう形が残った。じゃあ次のステップは100年間かけてどんな夢をみようかなというのを、みんなで考えないといけないんじゃないかな。太宰府をもっともっと、京都みたいに...、私のひとつの目標は京都なんですけども、いろんな文化があって、それは古いものだけが基本的にあるんじゃないで、いちばん最先端なものもあるのが京都の魅力だと思っています。それが混在できる空間がこのまちにあればいい。その世代ごとに楽しめるものたくさんあって、それが多くの太宰府の人たちに感動を、ドキドキを、ウキウキを与えられたらいいんじゃないかな。で、10年前くらいからひとつやりたいことがあります。このまちに牛を500頭、アートで作ってみたいと思います。これはニューヨークでみたんですが、ちょうどフェスティバルをやっていて、どこにでも牛がいるんですね。なんで牛がいるんだろう？って全然意味がわからなかったんだけど。天満宮で作っちゃうとどうしても座った牛になっちゃうんですね。まちの中でやるんだったら立った牛でも、赤い牛でも、ピンクの牛でも、黄色の牛でもいいと思うんですね。例えば五条のセブンイレブンの前に変な牛が手招きしているとか、招き猫みたいに（笑）。様々なところにあって、太宰府に行ったら牛だねっていう太宰府のイメージになるのもおもしろいかなって。もっと何か、深刻に考えずに楽しいことをやりながら厚みがでてきて、各分野で広がっていくと、いつのまにか目標というのが明確になっていくような気がします。そのためには終わったね、じゃダメなんですね。次にバトンタッチして、みんなでもっともっと頑張ろうぜ！っていう空気が必要だと思います。それと、九州大学の長沼賢海さんのお宅だったところを天満宮で譲り受けて、今そこが「アジア代表日本」の基地になっています。その基地でいろんな文化といろんな人が出会って、そこからおもしろい発想が出てきて、やってみようかなというものが出来れば、もう一步太宰府が進む。だから

すでに博物館ができた瞬間に、逆にいうと僕らの世代は幕引をして、次のステージをなるべく広く開けさせることがいちばん私どもの役割として必要なんじゃないかな。もう自分でやろうとすると失敗するんですよ、私たちの世代は。若いみなさんがステージにいて、私たちは後押しをする世代になりたいなあと思います。そのためのネットワークの紹介をするのが私の仕事。「アジア代表日本」は、安川哲史くんという福岡市でアジア太平洋こども会議をずっとやっている彼ががんばってくれています。その彼のネットワークで日比野克彦さんが来てくれました。このようにネットワークを紹介していくのが私たちの仕事で、そのネットワークを使ってどのような夢を描いていくかはCATのみなさんたちや、うちの若い職員たちの世代の役目ですよ。そのバトンタッチができないまちはやっぱりおもしろくない。個人的な話ですが、私が宮司になったのは30歳の時。何もできなかったから一生懸命手当たり次第にやったのが結構おもしろかったかなあと思ったんです。CATのみなさんも是非、既成の枠を超えてチャレンジすることの勇氣を持ってください。それが、いろんな人を受け入れて、いろんな文化と交流して、様々なものを受け入れたクロスロードだった太宰府という土地の役割だと思います。ぜひ前向きにもう一歩先にチャレンジして、ここで終わるんじゃなくてやっとここからスタートだということ意識して頑張っていたければありがたいと思っています。

藤：いいですか？

宮原：はい。

藤：おもしろいっすねー...、牛（笑）。あのようなイメージがポンと出てきちゃった時に僕ら飛んじゃうんですよ。ポンとイメージがずれて連鎖が始まるんです。悪い癖なんですけどね。友人とはこういう話ばかりしてて、どんどん妄想が膨らんで行って元に戻れなくなっちゃうんですよ。

で、瞬間的に連鎖したイメージ話してもいいですか？何の価値もないとは思いますが...。ちなみに500頭の牛と連鎖したのは、まず、彫刻よりも本物の牛の方がいいなと思ったわけです（笑）。それで牛を放し飼いにできる場所を探した方が楽なんじゃないかと考え、次に牛車を博物館まで通すことを考えているんです。公共交通機関を牛に引いてもらうとい

うイメージを考えつつ...、あるエリアに牛を飼って、そこで牛乳を搾るのはどうかと。そこで太宰府産の牛乳チーズができたとか、そういう太宰府が乳製品のブランドになってしまうとか、...そんな妄想を瞬間的に考えてしまうんです。(笑)

西高辻：実はね、太宰府にあるんですよ。

藤：あるんですか！？

西高辻：醍醐っていう場所なんですよ。醍醐というのは牧場があったから醍醐なんですよ。ね。

藤：おー、話してみるもんですねー。

西高辻：牛乳を飲むとですね、その味が醍醐味なんです。だから醍醐なんです。

藤：ホントですか？

西高辻：ホント、ホント。ウソのようなホントの話。

藤：それはすごい！それじゃ醍醐牛乳ですね。そのように話が連鎖していくのがおもしろいなあ。それをね、真面目に話すんですよ、牛がどうだとか 1 時間くらいみんなで話すんですよ。そうするとね、みなさんのイメージの中に具体的なイメージができちゃうんですよ。僕らのもっと悪い癖は具体的なイメージが蓄積されちゃうと、それを表現したくなっちゃうんですよ。具体的な形にしたくなっちゃうんです。それでもっと悪いことに動いちゃうんですよ。その結果、具体的になっていくという不思議な話なんです。誰かが描いたイメージというのは必ず形になっていく。逆に言うと、この博物館もそうですし、このまちのあらゆるものというのは誰かがイメージしたものが具体的になったものなんですよ。ずっと考えていた牛 500 頭というのは必ず形になっていくと思うんです。

またちょっと話は変わるんですが、政庁跡は使っているのか？という話ですが、僕の常識

では日常の延長では使えないと思うんです。今回かなりギリギリの使い方をしていると思いますが、それはあらゆる場は多くの経験を重ねた方がいいという確信を持って、僕はみなさんに「やるべきだ！」という話をしました。

これはアートの不思議な利用方法なんですよ。フェスティバル、祭りという非日常的な行為の延長です。通常は道とか川の上とかには客席をつくるなんてことはありえないわけですよ。しかし博多の山笠をはじめとして多くの祭りには祭りでしか許さない超常識的な街の使われ方がある。アートフェスティバルというのは日常的には許可できないことでも特例的に利用できる仕組みのひとつだと思うんです。だからみなさんが生活している空間で、日常ではそこで宴会したらダメだということでも、特例としてアートとして利用するというのはアリだと私は思うんです。その意味でのアートという手法は使う側がうまく使っていけばいいと考えています。

宮原：それこそ、芹沢さんが言われていたアートをツールとして使うということ...

西高辻：あの一、ちょっとごめんなさい。このまちの約 15%は史跡地なんですよ。この史跡地をどう使っていくのかというのは、このまちの一大問題なんです。だから逆に言うとな、この博物館をここに誘致したということも、史跡地をこのような使い方ができるよと、こちらから提案していくものではないかな。許可をもらってどうのこうの言うよりも。それに史跡地ももっと弾力性が必要じゃないかと。ここはもっともっと自由に使っていいとか、ここは守ろうね、景観も空気を含めて守ろうねというものもあると思うんですよ。その差別化をきちんとやらないと、やっぱりグシャグシャになってしまう気がするんですよ。まだまだこのまちは史跡地を活かしきれてないんですよ。保存じゃなくて、活かすということはこちらから提案していくことだと思うんです。逆にこの博物館を通して文化庁を動かしていくとか。それくらいのパワーをもってすれば、日本の中で京都や奈良はできないけど、太宰府でやっちゃうぞという新しい形ができるかもしれないなと個人的には思っています。

藤：去年だっけ、一昨年だっけな、大阪の国立民族博物館でアーティストが収蔵品を使って作品をつくるという取り組みをやっていたんですね。そういう前例が出てきた。その

学芸員が利用ということで一步踏み出したというかね。収蔵品も新たな視点で使っていくことで新しい価値が生まれてくる。それまで過去において価値を持っていた収蔵品...歴史的な古いものが、今の人たちがそれを新しい感性で扱うことで新しい意味が出てくる。変換されるわけですよ。だから、ものでもそうなんだから場所なんだからもっと大きく変わるんじゃないかと。しかし15%って大きいですねー。

芹沢：とりわけ、生きていく場所だから、そこの使い方についての提案が太宰府に住む人たちから出てきたら、すごく画期的だと思うんですよ。文化財だと、ありがたいものだから完全に隔離して保存しようと思しますよね。でも普通の建築でもそうですけど、そこに住んで使っていないと早くボロくなって崩れちゃうわけで、その時代その時代に必然性を持って、実際に使っていくというのが一番長持ちさせる方法ではないかと思うのです。その時代と共に生きていくわけだから。でも、多分そのやり方はまだ誰もいい方法を見つけてないと思うんです。京都や奈良も参考にできるようなやり方が太宰府から生まれていくとおもしろいですね。

宮原：そういう意味では、活かしていくという市民の力というか想いというのが重要になってくると思うんですけど。ここでですね、去年のスタッフスに実際に参加された方は手を挙げていただいてよろしいですか？す、少ない...。ま、ちらほらといらっしゃいますが。今、この熱気のあるお話を聞かれてですね、実際に参加されてどうだったかというのを客席の方から体験談をお話していただきたいと思うんですけども、いかがでしょう。

A：えーっと、私は万華鏡をつくってしまして、「不思議アートの覗き箱」といういやらしい名前をつけていますけど(笑)。実は政庁跡のすぐ横にですね、史跡地だから一般住民が住んでいるはずはないんですけど、おじいさんが住んでいるんですね。この方は文化庁が史跡地を設定する前にいちばん近いところに家を買ったんです。それでこの方にですね、ぜひこのフェスティバルに参加しようって言ったんですね。この方は高校生の時に戦争があって勉強ができなくて、戦後に歴史の先生になったんですね。中学高校の歴史の先生で、お聞きしたらですね何十万人かの人に太宰府を案内されているんです。私がかたままフランスの友人とですね、博多の駅の近くにいたら変なおじいさんがやってきて「あなた太宰府いきませんか？」って話しかけてきたのがその方だったんですけど。その方にフェステ

ィバルの時に政庁の周りを案内してもらいました。ま、言いたかったのはですね、とにかくこういう人たちが出てくるというのはすばらしいなと。あの場所をですね、実験室としていろんな使い方を考えて、いろんなことをやったらいいと思うんですよね。箱を作るんじゃなくてソフトをつくるということと、そのソフトにいかにか人が参加するかということが大事だと思います。このフェスティバルのおかげでいろんな人のつながりができたのがよかったと思います。若い人たちにがんばってもらって、早いうちに第2弾、第3弾と場所に関わらず新しいことを是非やって欲しいと思います。

宮原：他にどなたかいませんか？...いなければ江藤さんにおまかせしますけど。

江藤：じゃあ、このスタードームの本家の、北九州から九州フィールドワーク研究会（野研）のお二人に来ていただいていますので、お話してもらいましょう。

B：先程、映像にも出ていましたけど北九州大学の竹川の手先となって汗水たらして CAT のみなさんがやられたように竹を割ったりしている学生です。竹がこちらも身近に手に入るということですが、北九州も大学の近くの山とかに竹林がいっぱいあって、山に切り出しにいたりするんですけども。身近にあるものを使って、自分たちの身の丈に合うものをつくるというのがコンセプトで、それはバックミンスター・フラワーの話にも出てくるんですけども、例えば地域の特色を活かして、先ほど西高辻さんが言われたように、太宰府にある文化財というか、あるものを使う、芹沢さんもおしゃってた地域それぞれにあるものを使って独自色を強めるというか、他にないものをつくって活性化につなげていく。そういうことが、今日のシンポジウムで、期待してなかったという表現が悪いですけど、思いがけずそういう話に繋がったので、私はすごく刺激を受けました。で、そもそも私は大学で民俗学を専攻していますので、博物館というのも好きなんですけども、博物館は図鑑と一緒に見ることはできるんですけど、活かさきれてないというか、知識としては入るんですけど実生活に繋がらないというかですね。だから行政職員でもある CAT のみなさんが、大宰府政庁跡を使って市民のみなさんや市民以外の人ともつながって、AAF の一環としてできたというのはうれしかったというか、これからのひとつのモデルとして実感できるものだったと思います。うまく言えないですけど...、こんなもんでいいですか（笑）。

宮原：ありがとうございました。あちらの方も先ほど手を挙げてましたけど。

C：いや、私はただ見に行っただけです。

宮原：そういう方のお話も聞きたいですね。

C：私は単なるこの住民であります。今までお話されたのはそれぞれ専門的にやっている方のお話だったと思います。私はなんもわからんのですが、ただああいうものを見に行くのが好きだということと、太宰府が大好きだということなんです。ホントにこのまちはよくなりましたですね。昔は天神さまが鎮座していて大変ありがたいけど、私も年に何回かお参りするくらいという距離がありましたけど、今は天神さまが階段を下りてこられてね、私たちも大変身近に感じられるようになってきた。そんな太宰府のまちだと私は感じとっています。先ほどコーディネーターの方からお話がありましたが、よくあの国指定特別史跡を使えたのと、よく役人がいいと言ったのと。おもしろいのが原動力になったのが、太宰府の市の役人だったと（笑）。よくまあ、非常識というか超常識というか、ホントに世の中変わってきたなと思います。何よりもうれしかったのは本来は天神さまの權威を死守しないといけない立場の宮司さんが、そういうことを絡み付けてみんなの太宰府天満宮の存在意義、ひいてはこれまでの太宰府の歴史を活かしていくんだよ、というその姿勢ですね、私はここに来てホントによかったなあと思います。ホントにみなさん、これからの太宰府のためにがんばってください。私はいつまで生きるかわかりませんが（笑）。楽しみに生きていたいと思います。

宮原：とてもきれいにまとめていただいてありがとうございます。できれば会場の方と意見を交換したいと思うんですが...

D：私は都府楼跡（政庁跡）の横の月山というところ、漏刻があったところですね、そこに住んでいます。いわゆる礎石がですね、うちにあるんですよ、欠片が。友だちがですね、「おまえ、国の史跡地のもんぜ、わかっとーとや？」って言われるんですね。で、その友だちが宮司も言われるようにですね、都府楼の風が違おうて言うんですね。私も浪人時代にあそこで大の字になってですね、空想してたんですが。今日来てびっくりしたのはですね、江藤さんですねー。今日楽しみにしとったんですよ、江藤さんてどんな人かいなーって（笑）。

市役所と聞いていたんですが、想像してたのとちょっと違うんですねー（笑）。何が違うかっていうと、生きてるんですねー。生きてるんですよ！市役所に行ったらわかると思いますが、死んでる人が多いんですよ！（会場爆笑）。ここに来て生きている人がいっぱいいてホッとしました。そういう若い人たちで支えられているまち、私は71歳でございますがそういう人たちを支えていかなきゃと思いました。そのためにですね、「モヤモヤ」、今日いただきました（笑）。このモヤモヤ感を解決する場所をつくりました。「NPO 法人 太宰府ボランティアネットワーク」、いわゆるですね、低負担高満足社会をつくっていきたいと思います。これは何をするかというと、モヤモヤ感を持っている人は集まってきやいという場所なんです、「このモヤモヤはどげんして解決したらよかるうか」「いや、解決せんでもよかたい」とか。ボランティアでできることをやってみよう、そうやって考える場です。今からどんどん仕掛けをしたいと思っていますが、本当に今日は西高辻さんの熱いお言葉というのはですね、私は本当に感謝すると共にですね、今日この場に来て家に帰ったら、「70歳捨てたもんじゃねえぜ」と言いたい。支えとして私たちに何が出来るか。もうひとつ、太宰府というまちに入ってきたら、「あそこの人間はハートが違うね」という場所だけじゃなくてそういう人を育てたい。ここで育った子どもたちが5年、10年先にいい人間になっているようなまちにしたい。なっていくます、少しずつ。そのために私はここに住む人の住民税は倍にしたい（笑）。史跡地も多く固定資産税が入らないので、住民税を多くとってこれを人づくりに使いたい。それが私の永遠の夢でございます。

宮原：非常に壮大な夢を語っていただきましたけれども、他にどなたかいませんか？と言ってもあと4分となりましたけども（笑）やばい。

藤：じゃあ、はい（挙手）。太宰府は大学が多いですし、大宰府というと学問というイメージで、ソレと直接は絡まないとは思いますが...、僕自身が子どもと一緒に活動していて感じるのですが、夢を見る力というか、イメージする力が僕自身も含めて非常に乏しいのではないかと...。そのイメージ力をどうやって作るのか、どうやって高めていくのかというのが大きい問題だと思うんです。

例えば何か困難があった時にそれを解決していくためにどれだけ多くのイメージを発生させることができるのか。例えばイメージ力を持つ、空想する力を持つことで自由度が高ま

るのではないかと。いろんな知識を学ぶことで、現実の自分の場所とは全然違う場所に自分自身を持ってゆく自由度を高めていけるのではないかなと…。もともと学習する、教育を受けるということはイメージし、行動する力を身につけることだと思っているんですよ。それが現在どんどん違う方向に向かっていくような気がしています。僕自身も高度経済成長期に育って、受験戦争の被災者であり教育に対して多くの違和感を持ちながらここにいます。

太宰府という地域で新しい教育の概念について議論し実験してゆけるような超常識的な場があればと思うのですが...というのを言い忘れてたので言っておきます。

宮原：ありがとうございます。他に言い残したことはございませんか？そろそろお時間になりました。スタフェスというのは一過性のものじゃなかったな、とすごく思いました。これだけの方がいらしてくださって、これだけの熱い想いを持ってこちらに来ていただいて、たくさんいいお話が聞けたと思いました。拙い進行ではございましたが、これを持ちまして本日のシンポジウムは終了させていただきます。ありがとうございました。

了